

R7年度学校評価書

R7年度 スクールプラン			学校評価書(アンケートを踏まえた振り返り)		
項目	重点目標	R6 具体的取組	R6 目標	成果と課題	改善策・向上策
重点目標 1 教育課程 および 学習支援	・授業力の向上を図るとともに、主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善を推進する。	a : 「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善を推進する。」	目標：授業の中で、主体的・対話的で深い学びができたと感じた生徒 (80%以上)	教員の70%以上がタブレットを効果的に利用しながら教科指導を行っている」と回答している。生徒も教科により差はあるものの、概ねタブレットを積極的に活用し、効果を上げた」と回答している。生徒が理解を深めるための情報収集、発信を効率よく促すために、事前の教材研究や教師間の情報交換をする時間がしっかりと確保できるような取組を工夫していきたい。	外部への公開授業を兼ねた10月の授業研究週間はもちろん、普段から同じ教科内だけでなく、他教科の授業についても情報交換を深め、タブレットの効果的な利用法を工夫していく。また、授業例などを紹介する場面を増やし、教科内だけでなく、他教科でも応用できるような環境を整えていく。
		b : 「教科連携を通して、多角的な視点で学ぶ授業を実践する。」	目標：教科連携による授業により、多角的視点を身につけることができたと考えられる生徒 (70%以上)	1年生で「公共、家庭」の教科連携を実施している。毎月テーマを設定し、各教科3時間ずつ実施した。連携により多面的にテーマを捉える点で効果が高まったが、それぞれの教科書内容の進度に遅れがでているため、来年度は実施方法を再検討していく。また、他の教科でも連携できるテーマの検討をますます進めたい。	授業研究週間に他教科の授業を互見する取組を行った。教科連携のヒントにもなるので続けたい。連携することのメリットは大きい。本来の授業内容にうまく合わせないと、時間数の減少によるデメリットも生じる。連携しているテーマを年間授業計画の中にどのように組み込むか工夫していく。令和7年度は実施時期が毎学期途中であったが、学期末などの時間を利用することも考えたい。
重点目標 2 進路支援	・基礎的汎用的能力※を高めていくための、主体的・探究的な姿勢を育成する。  ※「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」	a : 「目標とすべき将来の生き方・進路を考えて進路計画を立てるとともに、その実現に向けた取組を進める。」	目標：目標が明確になった生徒 (80%以上)	「進路ストーリーに基づき、生徒の進路に応じた個別指導体制」に関しては、担当する教員や、生徒・保護者とも高い評価を得た。特に進路を決定していく3年生は、学年会の協力もあり、志望分野の記事をまとめるピブリオ、小論文講座などの行事もあり評価は高い。志望校を決めていく2年生には、3学期に志望理由書をまとめる行事を計画した。1年生では将来の職業(社会との関わり)と進路先を意識させる講演会を継続して実施していく。(3年86.6%、2年90.9%、1年84.7%)	各学年とも学期始めに進路ストーリーを教室に掲げ、計画的な進路指導を行う。オープンキャンパス情報などの生徒玄関掲示も継続していく。また、講演会資料などの進路情報を、教室や廊下に掲示していくことで、更なる進路意識の向上を図る。特に、2年生は秋に生徒保護者対象の講演会を実施し、進路実現に向けたムードを高めていく。
		b : 「自己の適性を理解し、興味関心ある分野の探究を深める意識を醸成する。」	目標：自己理解ができる認識をもつ生徒 (80%以上)	「大学の先生からの助言や支援をうけ、探究的な学習などに活かすことができた」との質問に関して、1・2年生から評価が高い。1年生の理数・探究基礎、2年生のグループ探究では学期毎に発表を行い助言を頂いている。その助言を探究に上手に取り入れ、独自の調査や分析、独自の意見としてまとめる作業に繋がれるかが課題である。特に1年生は外部との繋がりが強い理数探究基礎や企業研修、ボランティアタイムの影響で、数値が高いと思われる。(3年76.3%、2年86.7%、1年97.7%)	理数探究基礎では、今までの探究活動以上に、多角的・複合的に対象を捉え、課題に向き合うことにフォーカスしたプログラムも準備していく。特に、地元大学との連携を強化し、大学教授陣からONLINEで支援を受ける活動も展開する。また、大学の出席授業などを積極的に活用し、生徒の興味ある分野を開拓する取り組みも行いたい。
重点目標 3 生徒支援	・生徒会活動や学校行事、部活動等への主体的参加を促進する。 ・心身の健康や安全に関する自己管理能力を高め、社会で生き抜く力を育成する。	a : 「生徒自らが、校則を含めた現状の問題点を見だし、仲間と協働して、学校生活の向上を目指す。」	目標：生徒会主導のもと、学校生活が向上したと考える生徒。(70%以上)	「校則を含めた現状の問題点を主体的に見つけ出し、仲間と協働して改善に努めた。」に関する生徒評価が、1年生で81.2%、2年生で68.4%、3年生で67.0%である。本年度は前期生徒会が学校祭の文化祭期間に限定で頭髪基準を設け、生徒、教職員それぞれの意識調査を行った。(教職員75%、保護者63%)  「部活動や委員会・学校行事は、自分にとって学校生活を充実させるものとなっている。」に関する生徒評価は、生徒、教職員、保護者で90%である。生徒数、教員数が減少する中、充実した活動ができるようにする必要がある。(教職員91.6%、保護者92.5%)	現状に相応した校則の見直しは、社会的背景を熟慮し、生徒会と協議し進めていく。  部活動をはじめとする学校行事について、生徒数や教員数が減少する中で運営の方法の工夫を検討する。
		b : 「LHや避難訓練等を通し、教員・生徒共に防災意識を高める。」	目標：避難経路や避難場所など、被災時にどのように行動すべきかを確認出来たと考える生徒 (70%以上)	「LHや避難訓練等の行事を通し、自然災害や防災についての基礎的・基本的知識を理解し、自助共助の意識を高めることができた。」については、1年生93.0%、2年生91.8%、3年生84.6%と全体でも9割近くが防災意識が高まったと評価している。	生徒支援部が、「全教室対応の避難経路図」を作成し直した。また、令和7年度は、水害被害についての避難経路確認を行った。今後、自然災害の対応について、各年度で内容を変え実施していきたい。

R7年度学校評価書

R7年度 スクールプラン			学校評価書(アンケートを踏まえた振り返り)		
項目	重点目標	R6 具体的取組	R6 目標	成果と課題	改善策・向上策
重点目標4 グローバル・サイエンス・SDGs 企画総務	・探究活動や国際交流、学際的な学びを通して、社会の課題を多方面から分析し、持続可能な社会の実現へ向けた意識を育成する。	a: 「探究活動に取り組むことで生徒の論理的な思考を育み、自分の考えを発信する力を育成する。」	目標: 探究活動に積極的に取り組んだ生徒の割合 (70%以上)	令和7年度に新たに設定した目標を検証するアンケート項目がなかったため、数字による検証はできなかった。グループごとに探究テーマを設定して、積極的に取り組んでいる生徒の割合はかなり高いと考えられる。県内大学教員、県教育総合研究所教員、県探究サポーター、地域の経営者など本校教員以外の協力を得ながら、全校教員が協力して、生徒の探究活動を支援できた。	令和8年度も引き続き、生徒が自らの関心に基づいて探究活動を実施できるよう外部機関と協力して、全校教員で支援していく。また、アンケート項目を設定して、目標の達成状況を検証できるようにする。
		b: 「姉妹校交流・英語セミナー等の学校行事を通して、異文化交流活動を推進する。また、授業やフロンティアタイム等において理数への興味をもち、探究活動を推進する。」	目標: 参加者満足度(80%以上)	8月にはニュージーランドの姉妹校リカトン高校に14名が訪問し、交流活動を行った。また、2月に実施した英語セミナーでは、次年度グローバルコースに進む生徒26名が参加し、いずれも満足度は高かった。オンラインで姉妹校をはじめ様々な海外の人たちとの交流活動を実施した。	令和8年度は、8月にオーストラリアの姉妹校を訪問し、交流活動を継続実施する。また、オンラインでの姉妹校との交流や英語学習アプリを使って、海外との交流活動を積極的に行っていく。
重点目標5 外部との連携 企画総務	・教育活動の積極的発信を通して、地域や保護者との連携を促進する。 ・世代を超えた学び合いや研究機関との連携を促進する中で、学ぶ喜びの醸成に努める。	a: 「オープンスクール、学校説明会等の実施やわかりやすいパンフレット、HPの作成により、学校教育活動の広報の充実に努める。」	目標: オープンスクール、学校説明会等で、学校の教育活動の内容を理解できた割合 (80%以上)	オープンスクールや学校説明会において、本校の教育活動の内容を理解できた割合は100%であった。また、本校ホームページ (HP) において、常に最新の活動を配信してきた。積極的な情報発信に関する実感は、適切な情報発信をした教員の割合95.1%という結果にも表れている。令和6年度よりも改善しているものの、あまりHPを見ていない保護者が36.3%いたり、中学生やその保護者の閲覧状況が把握できていなかったりするなどHP閲覧を促す取組みの強化が必要である。今年度は新たに本校の教育活動の様子をInstagramで発信した。動画の視聴回数は1.6万回を超えるものもあり、広報活動の一つとして有効な手段だと考えられる。	全校教員からの原稿作成の協力を得たことで、更新回数目標達成を大きく上回ることができた。今後も引き続き全校をあげて、教育活動の充実と発信に取り組みたい。また、本校保護者や中学生とその保護者にもHP閲覧を通して、本校の教育活動の理解促進が図れるよう、PTAの会議や学校説明会などの機会を利用して、HPについて広報していきたい。学校紹介パンフレット、クリアファイル作成をはじめ学校説明会までの担当を企画総務部が担当しており、スムーズな広報活動を実施できた。令和8年度はオープンスクールなど従来の広報活動をブラッシュアップすることに加え、SNSを活用した広報活動をあわせて行っていきたい。
		b: 「Hino・Quest(総合的探究)において世代を超えた交流の場を増加する。」	目標: 大学教員などから助言・支援をうけ、探究的な学習・進路学習などに活かすことができた (70%以上)	大学教員からの助言や支援を受け、探究活動に活かすことができた生徒は、1年生で97.7%、2年生で86.7%、3年生で69.1%であった。年間で50名を超える大学教員を招聘して助言を受けている。探究的な学習だけではなく、進路につながる助言が得られるよう大学教員との連携を強化していく必要がある。	福井大学国際地域学部と本校2年生との連携交流活動は4年目を迎える。3年間の活動を踏まえて、福井大学で学ぶことや、福井で生活することの意義について考えるなど、交流活動をより充実させていく。また、県内他校との意見交換の場を通して、自分自身の活動の省察と今後の展望を考える機会を増やしていきたい。